

報告概要「東大 EMP が目指す課題設定・形成能力の育成と日 EU 関係へのインプリケーション」

東京大学 EMP 企画・推進責任者
横山禎徳

実際にフランスに居住している経験から分かったことは、生活実感としての EU はあらゆる面でまだ発展途上だということであった。すなわち、EU はヨーロッパ理想主義か、アメリカを意識したユーロ・セントリズムか、はたまたその両方なのかがあいまいであり、政治家側の願望と庶民の感覚との乖離は埋まっていない。EU レベルで共通のもの、たとえばユーロが定着する一方で、生活の基本的なところで利便性の面から共通化すべき分野が各国にそのまま残されているものもある。その一方で、フランスとドイツの密接な連携を印象付けることは意識的に強く打ち出されていたように見受けられる。そうした経験、そして東京大学での EMP 企画・推進者としての経験から、日 EU 関係への提言をおこなう。

多極型覇権構造の世界で、「覇権主義になれない、ならない大国 (hegemony でものをとらえない国)」である日本。そのなかにおいて、日本の自己主張を担えるレベルの総合的能力をもった人材を創出するための教育プログラムが、EMP (Executive Management Program) 教育である。EMP は主として課題設定能力の養成を目指しており、その基盤として「地球の持つ自己調節能力以上に巨大化する人類活動の持つべき自己規律の動的体系化」を中核にすえた「知の構造化」を試みている。具体的には、存在感を持って自己表現でき、公共精神もある魅力的な人間の育成、そのために課題設定型リーダーシップに必要な一貫性のある思考力訓練のプログラムを組み立てた。「教養・智慧」、「マネジメント知識」、「コミュニケーション・スキル」の三つの分野を扱うが、特に、既存の学問領域の間に存在するあまり語られることのない重要課題へ注力し、多様化する世界での共通行動規範とは何なのか、科学・技術の進歩を反映した新しい世界観、人間観をどのようにとらえるかといったことを考えられる人材育成を目指している。人文系、理工系という既存の分野を超えて講師陣に最先端の課題を提示と受講者との刺激的な議論を要求することによって、分野・テーマ間の中での生じる課題の議論を促している。また、「マネジメント知識」においても各国のビジネス習慣だけでなく、その背景にある文化、思想を理解してもらうために、各国大使招いて講義を聞き、議論をしている。

日 EU 関係に関して言えば、EU は知的資産レベルでの連携を重要視すべきである。知的資産とは大学にこそ存在する。知的資産の多面的集積に関して、近年、大学の役割は増大している。したがって、日本との関係を期待するのであれば、大学との関係を大事にすべき。とりわけ、日本が世界的にリードする最先端科学分野を今後成長する分野として期待し、知的資産の共同活用という点で世界 (EU) と繋がることのできる。EU は、外交をこえて直接、大学などの先端機関にも関心を示すことを期待する。

文責：井上淳 (一橋大学経済研究所)。報告者の了承の上、掲載。